

ローマ人への手紙8章14-30節 「栄光のための苦しみ」

1A 子としてくださる御霊 14-17

2A 栄光の自由 18-25

1B 神の子の現れ 18-23

2B 望みによる救い 24-25

3A 神のみこころ 26-30

1B 御霊の執り成し 26-27

2B すべてを益とされる方 28-30

本文

ローマ人への手紙 8 章 14 節を開いてください。14 節から 30 節までを一節ずつ見ていきます。私たちは前回、御霊に従う生活について見てきました。肉の問題に対して、御霊に従うことによって、その行いを殺すのだというところで話を終えました。14 節から、数多くの大事な教理、教えが詰め込まれています。その中で、二つの主なテーマがあります。一つは、神の子どもであります。今朝、神の子どもについてこの箇所から、かいつまんで話しました。もう一つは、キリストにある苦しみです。神の子どもは、栄光の姿に変えられるところで現れます。けれども、その栄光に入るまでに私たちは苦しみがあり、また、うめきがあるというところを見ていきます。

1A 子としてくださる御霊 14-17

¹⁴ 神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。^{15a} あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。

私たちが、御霊によって新たに生まれ、神の子どもになりました。御霊に導かれて、神の子どもとしての恵みにあずかっています。

その一つが、父に愛された子としての確信です。罪の支配を受けている時には、自分が罪によって死に、死んで裁かれるという恐れがありました。律法の支配を受けている時も同じです。しかし、そのような、恐怖に陥れる奴隷の霊ではなく、「子とする御霊を受けたのです」とあります。この「子とする」は、法的に子とするということであり、養子縁組と言ってよいでしょう。罪の中で生きていたところから、キリストによって神に買い取られて、そして神が私たちをご自分の子にくださったのです。養子に取られた子は、生まれてきた子と全く同じ権利と相続を持っています。ここが大切な点で、唯一の神の独り子であるキリストがおられ、この方と同じ権利と相続にあずかるということにつながっていきます。

^{15b} この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。

今、私たちが神に祈る時に、恐ろしい存在ではなく、けれども畏敬を忘れることもなく、「アバ、父」と叫ぶのです。アバは、お父ちゃんというような言い方で親しみを込めた呼び名であり、父は、お父様ということで、尊敬を込めた呼び名です。神は威厳のある父のような存在であり、また愛してやまないお父さんのような存在であり、全き愛によって私たちは守られています。

¹⁶ 御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証してくださいます。

私たちが無理やり、自分に言い聞かせて、自分は神の子だとみなして思う必要はありません。なぜなら、内に住まわれる御霊が、私たちに霊に、私たちが神の子どもであることを証してくださいますのです。だれかに教えられるまでもなく、自分はずでに教えられています。使徒ヨハネは、第一の手紙で、「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。(2:20)」と言いました。注ぎの油とは聖霊のことです。

ここがカルトとの違いでしょう。カルトは洗脳と人々を束縛することによって、彼らが真理だとするものを押し込まないといけません。御霊に導かれている人は、御霊が自分の霊に教えられるので、そんな必要がないのです。新しい契約を預言したエレミヤは、神が律法を心の中に書き記すと云った後に、「彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ。」と言っています(31:34)。

私は、大学生二年生から三年生になる時、一か月ほど放蕩息子をしていました。熱心に教会には通っていたのです。しかし、同時の異端のカルト教会にも通っていました。私の心が混乱しました。いろいろな、今までの教えと違う教えを聞き、三位一体の教えを否定された時に本当に混乱しました。夜遅く、バイト先にいたのですが、そこで独りになっている時に、「それでも、おまえは神の子どもだ」という内的な確信、声を聞きました。御霊は、私から離れておられませんでした。

¹⁷ 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。

子どもであることは、親密な関係を持っているということだけでなく、相続をする権利を持っているということです。ここで大事なことは、私たちが養子縁組になっていて、御父とキリストの間にある関係の中に私たちが入っているということです。イエス様が神の御子であり、神であって、私たちは人間にしかすぎませんが、それでも、神のかたちに造られた者として、神の家族の中に入れさせていただいたのです。それで、「キリストとともに共同相続人なのです」とあるのです。これがす

ごいことです。キリストは、父なる神からすべてのものを任されました。そして、私たちがキリストにあって、同じようにすべてのものを任されるということです！「エペ 1:10-11a 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。11a またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。」

そしてパウロは、そのような栄光に満ちた将来に至る過程は、苦しみののだということを言っています。「キリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから」と言っています。ここからパウロは苦しみについて話し、8章の最後まで話し続けます。

実はすでに彼は話していきまして、5章3節で「苦難さえも喜んでいきます」と言っていましたね。その前に、「5:2 神の栄光にあずかる望みを喜んでいきます。」と言って、それから、「苦難さえも喜んでいきます」と言っていました。パウロにとって、彼が主イエスに出会い、回心をした時から、多くの苦しみを経なければいけないことを前もって伝えられていました。そして今、パウロはコリントからローマに対して書いていますが、彼はここに来るまでにどれほどの苦難を経たか知れません。ピリピでは鞭で打たれ、テサロニケでは命が狙われていたので逃げて、ベレアにまでテサロニケの者たちが追ってきました。そしてひとりでアテネに来たのです。それからコリントに来ましたが、ここでも強い反対に遭いました。

そしてこれは、パウロの特別な経験ではなく、主ご自身が弟子たちに教えていられたことです。あの山上の説教の八つの幸いの最後は、「義のために迫害される者は幸いです」で終わっているのです。苦しみは、世からキリストに属するようになってから、始まります。イエス様が弟子たちに、世がわたしを憎むなら、あなたがたも憎むということを前もって語っておられました(ヨハネ 15:18)。また、信じていない人と同じように、病にかかったり、試練を受けます。そして、世の終わりにはその苦しみが増すこともイエス様は警告されていました(マルコ 13:13)。それは、とりもなおさず、私たちが従っているキリストご自身が、苦難の後に栄光に入ったからにほかなりません。十字架への道を歩まれ、その後で主はこの方を死者の中からよみがえらせ、

2A 栄光の自由 18-25

1B 神の子の現れ 18-23

¹⁸ 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます。

「今の時の苦難」は、「取るに足りない」とパウロはみなします。ここの「考えます」という言葉は、再び「数える」とか「みなす」とか、信仰のゆえに義とみなすと同じ言葉が使われています。つまり、取るに足りないわけがないのです。その苦難は現実のものであり、その苦しみ自体は苦しくないというのではなく、実際に苦しいのです。コリント第二でパウロはこう言っています。「4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすの

です。」栄光とは重さを元々表していますが、後に来る栄光の重さを、苦難の重さと比べたら、一時の軽いものなのだと切り切っているのです。しかも、比べ物にならないくらいだと言っています。

パウロはコリント第二 11 章で、自分が通った苦難について語っていますが、これは壮絶です。「11:23-28 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。24 ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、25 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。26 何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、27 労し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。28 ほかにいろいろなことがあります。さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。」これらが、取るに足りない、一時的で軽いと言っています。

つまり、パウロが言いたいのは、後に来る栄光は、信じがたいほどに栄光があり、その重さは、どんなに苦しみが多くても、無に等しいほどにしてしまうほどに栄光に満ちているということです！パウロはパラダイスに引き上げられた経験がありますが、「言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」と述懐しています(Ⅱコリ 12:4)。人間の言葉で言い表すものであれば、その栄光をものすごく小さいものに限られたものにしてしまう、ということです。それほどの、とてつもない栄光、言葉では決していい表すことのできない栄光が現れます。天においてそれは蓄えられているとペテロは第一の手紙で言っています(1:4)。そして、「1:5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。」と言いました。

¹⁹ 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。²⁰ 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。

²¹ 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。

これは一体どういうことか、午前礼拝でも説明しました。私たちは、創世記 1 章と 2 章、アダムが罪を犯す前に、神がアダムのために何を備えておられたかを思い出す必要があります。アダムを神が造られる前に、天と地のあらゆるものを造っておられました。そして、ご自分に似せてアダムを造られ、神がそれらを支配しておられるように、人にそれを任せて支配するように命じられたのです。これが神の子の働きなのです。ところが、アダムは罪を犯しました。そのために、地も呪われたものとなりました。アダムが罪を犯したので、人が神から離れただけでなく、アダムが支配して、管理するはずの被造物も、その罪の影響の下に置かれてしまいました。私たちが経験しているコロナ禍。これもまさに、被造物が虚無に服していることの現れです。今の自然界は神の栄光を現し

ているのですが、それでも、それが制限されて、そこには弱肉強食や過酷な天災が不条理にも存在するのです。

神は、そこでご自分の救いのご計画を立てられています。それは、ご自分のかたちに造られた人をまず救われるご計画です。この者たちを神の子どもに回復させ、神の栄光を現す姿にし、それから世界をエデンの時のように取り戻すというご計画を立てられたのです。私たちは、自分の魂が天に行くか行かないか、ということだけで救いを考えてはいけません。アダムの時のことを考えないといけません。キリストは、天から空中にまで降りて来られて教会を引き上げられます。そこで私たちのからだが一瞬にして変えられて栄光のからだになります。心や魂のみならず、からだも列記とした神の子どもになるのです。そして、次に天から地上に戻られます。その時に、天変地異が起こりますが、主がエルサレムのオリーブ山に足を置いて立たれると、一気に地殻変動が行われ、環境が一気に刷新します。獅子が牛と共に草をはみ、病がなくなり、荒野は川が流れ、人々は戦争をしなくなる平和が訪れます。それはエルサレムの神殿に王座を持っておられるキリストが、ご自分の教えを世界中から来る人々に教えられるからです。神の正義と平和が世界に満ちます。

それまでの間、切実な思いで待っているのが被造物なのです。「神の子どもたちが現れる」のを待ち望んでいるとありますが、自分たちを正しく治めてくれる神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいるのです。そして 20 節ですが、彼らが虚無に服しているのは、「服従させた方によるもの」とありますが、神ご自身が被造物をそのように虚無に服するようにされたので、神が今度は自由にするとお決めになったら、解放されることも知っているということです。そして 21 節で、神の子どもが現れたら、自分たちもその栄光の自由にあずかることができると言っています。

²² 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。²³ それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだ贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。

今の状態を、被造物も、また私たち自身も「うめいている」という言葉でパウロは語っています。そして「ともに産みの苦しみをしています」とも言っています。覚えていますね、イエス様がオリーブ山で世の終わりについて語られた時に、「マル 13:8 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで地震があり、飢饉も起こるからです。これらのことは産みの苦しみの始まりです。」被造物が地震などで苦しみ悶えます。それらは産みの苦しみの始まりだと言っています。けれども、産みの痛みというものの特徴は、望みがある痛みですね。出産したら、今までの痛みはどこに行ったのか？と忘れるぐらい、大きな望みがあるのです。それが、ここでの「うめく」という言葉にあるのです。被造物が天災や環境破壊によって苦しみますが、そこには、いつか神が、神の子の現れと共に自由にしてくださいという望みがあるのです。

そして、私たち自身もうめいているのですが、それにも望みがあります。それが、「からだを贖われる」という望みです。私たちは7章から、私たちのからだには罪の律法が働いていて、神の律法に同意している心の律法との間でがんじがらめになっている話しを読みました。しかし、御霊が与えられたので、御霊に従うことによって肉の行いを殺すこととなります。しかし、そのからだには罪の律法が働いていることには変わりません。神は、からだを贖われることによって、罪の律法をなくしてしまわれるのです。栄光の姿にからだを変えられます。「ピリピ 3:21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」この栄光の姿に変えられることによって、神の子どもになったことが目に見える形で現れるのです。このことが起こるのは、ピリピ 3章 20節、つまり今読んだところの直前に書かれていて、天から、「主イエス・キリストが救い主として来られる」とき、すなわち教会の携挙の時です。

ここで興味深いのは、「御霊の初穂をいただいている私たち自身」とあります。御霊によって新たに生まれて、御霊に従う者に私たちを神はしてくださいました。しかし、この御霊の働きは収穫でいうところの「初穂」にしかすぎないと言うのです。レビ記 23章には、初穂の祭りというものがあつて、大麦の収穫の初穂を神に献げることによって、収穫全体が神のものであることを言い表すのです。それと同じように、私たちが御霊によって新たにされて、御霊に従っているのは、あくまでもこれから来る、御霊の収穫の初穂にすぎないとしているのです。イザヤ書に、次の預言があります。「32:15 しかし、ついに、いと高き所から私たちに霊が注がれ、荒野が果樹園となり、果樹園が森と見なされるようになる。」つまり、主が再臨されて神の国を地上にたてられる時に、御霊は荒野を果樹園のようにするというお働きを御霊によってなされるのです。霊が注がれると被造物がこのように栄光の自由の中に入ります。これが収穫であり、その初穂が私たち、キリストを信じることによって救われた者たちなのだということです。

したがって、御霊が教会に与えられて、それぞれの賜物が与えられ、私たちは主をほめたたえ、喜んでいますが、これは御霊の現れの一部にしかすぎず、将来の御国における御霊の注ぎの一部なのだということです。御国においては、例えばすべての病がなくなります。今現在、癒しの賜物が教会には与えられています。けれども、必ずしも癒されるとは限りません。癒される人もいれば、そうでない人たちもいます。けれども、それは御霊の初穂のみを私たちは経験しているからです。

2B 望みによる救い 24-25

²⁴ 私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。²⁵ 私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。

私たちは、神の恵みのゆえに、信仰によって救われました(エペ 2:8)。そこには、からだを贖わ

れるという望みがともにあったのです。救われたというのが、魂だけで、魂が天に行くことだけではなく、このからだは栄光のからだに変えられること。そして、世界の被造物がその栄光の自由の中に入る。それもすべて含まれる望みがあるのです。自分が新しく造られるだけでなく、すべてが新しくなるという望みがあるのです。

そしてパウロは、望みについてその定義を説明しています。目に見えないものであるということです。ここが信仰を、忍耐をもって働かせる必要のある領域です。目に見えていたらもう望みではありません。でも、見えないので私たちはうめくのです。しかし、そこで忍耐が必要です。見えなくとも信じるのです。待ち望むのです。

3A 神のみこころ 26-30

1B 御霊の執り成し 26-27

そこで、栄光の自由が与えられる時まで、その弱さを助けてくださる方がいます。御霊ご自身です。御国がこの地上に来るまで、御霊が私たちの弱さを助け、執り成してくださいます。

²⁶ 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださいます。

私たちには、「弱さ」があります。それは、「何をどう祈ったらよいか分からない」という弱さです。うめく、ということそのものが、そのことを物語っているのではないのでしょうか？何が起きているのか分からない。分かっても、神のみこころがどこにあるのかが分からない。そういった、分からないというところの弱さです。これは、被造物のうめきが終わる、世の終わりになればなるほど、厳しいものとなるでしょう。産みの苦しみは、出産の直前が最も苦しいです。出産に近づけばそれだけ、痛みが増します。同じように、私たちもどうやって祈ればよいか分からないという、自分たちの理解を超えたところにある出来事が自分の身近にも、社会的にも、世界的にも降りかかってきます。

そこで、御霊が助けてくださるのです。「ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださいます」というのです。言葉にならないのは、理解ができないからですが、そこにこそ、うめきがあります。しかし、その時に、うめいている時に、御霊が助けて下さり、実はそこで執り成しておられるということです。そのうめきは、例えば、サムエルの母ハンナが、自分が不妊なので心をいらだち、苦しくなって、激しく泣きながら祈った時のようなものと想像します。それを見ていた祭司エリは、彼女がぶどう酒で酔っていたのだと思ったほどです。唇だけが動いて、声は聞こえなかったからです（I サムエル 1 章）。そして、彼女は言葉に言い表した時に、みこころにかなう祈りを献げていました。生まれてくる男の子を、主に献げるという誓いです。

そして、新約聖書には、霊によって祈るという賜物が紹介されています。異言の賜物です。「1コリ 14:14-15 もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません。15 それでは、どうすればよいのでしょうか。私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。」知性で理解できる言葉ではないけれども、舌を動かして神に祈ったり、賛美したりするのが異言です。自分では理解できませんが、神はその祈りや賛美を受け取ってくださると信じて、御霊の語らせるままにします。どう祈ったらよいか分からない時に、私も異言で祈ることがよくあります。知性ではなく、ただ自分の霊を御霊にまかせます。

²⁷ 人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなして下さるからです。

父なる神は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なので、私たちの心でのうめきを執り成している御霊の思いをお知りになっています。しかも、御霊は、神のみこころにそって執り成しておられるので、その思いを存分に知っておられるのです。御心から離れていけば、その祈りはきかれません。けれども、みこころに沿っているので、聞かれているのです。ですから、私たちがあきらめずに祈る必要がありますね。失望しないように、御霊が助けてくださいますから。

パウロは私たちのことを、「**聖徒たちのために**」であると言っていますね。聖徒とは、神のために聖別された者たちです。神の聖なるみこころにそって自分たちもその聖さにあずかっていて、その中で執り成しを受けている、ということです。ですから、祈りは、肉の思いや自己中心的な思いを果たすための手段ではなく、あくまでも、みこころが行われるようにという願いに基づいています。

2B すべてを益とされる方 28-30

28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。

私たちが栄光に入り、また被造物が栄光に入るまで、私たちはうめいていることを今、見てきましたが、それはあたかも混乱し、無秩序のように見えるかもしれません。今のコロナ禍を見ても、そうですね。けれども、決してそうではない。神のご計画がしっかりとあって、その計画に従っているということ。すべてのことは相働いて、益となっているということです。

このことを知っている恵みにあずかっているのは、「**神を愛する人たち**」です。すべての人にとって、この恵みがあるのではないのです。神を愛するのは、ヨハネ第一によると、「まず神が愛し、それから愛している私たち」ということです。「4:19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」神が、独り子イエス・キリストのいけにえによって、愛を示されましたが、それを知った者たちが、自ずと神を愛しています。そして、神を愛する者たちは、「**神のご計画にしたが**

って召された人たち」とも呼ばれています。召されるというのは、救われることと同じですが、神のほうで救うように呼んだ、という意味です。神のご計画があって、その中で私たちひとりひとりを、ご自分の御子に似せるように、栄光の姿に変えるように召されたのです。

「すべてのことがともに働いて益となる」とありますが、まずここで「益」と訳されているのは「善」です。良きに働くと訳したほうがよかったのではないかと思います。そして、すべてのことが、ともに良きに働くのだということです。だということです。何か良いことだけが共に働いて益になるわけはありません。すべてのことが共に良きに働きます。そして、すべてのことが良いことだとは言いません。悪がいっぱいあります。しかし、その悪をも神はご自分の主権の中でも用いられて、ご自分の善のために働かせるのです。ヨセフが、兄たちが自分を売ったことについてこう言いましたね。「創世 50:20 あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。」

29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

私たちが、28 節の約束を読んで、ここの「益」あるいは「良きこと」が自分にとって良いことと思っ
てしまっ
ては間違っています。あるいは、自己中心的に自分の利益になることと読んでもおかし
くなります。そうではなく、神にとっての良きこと、また神の御目的が良いことなのです。それが、「御
子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められた」というところ
です。私たちが、御子の姿と似たもの
に変えられるということが良きことであり、そのために、すべてのことを相働かせるということでありま
す。そこには苦しみもあります。しかし苦しみは、5 章で学んだように、忍耐に、忍耐が品性に、品
性が希望を生み出すのです。御子の姿に変えられていくための過程であります。ヨセフがそう
でしたね、裏切った兄たちを赦しました。ヨセフは苦しみを通して、神を愛するからこそ、キリストの思
いが彼に与えられたのです。

そして、ここで興味深いのは、神のご計画について、予め定められているということです。予め定
めているよりも前に、予め知っているということがありますね。私たちの命は、偶然に生まれたもの
ではなく、愛の神の御手の中に、予め知られていて、そして救うことも予め定めてくださっていたの
です。「エペ 1:4-5 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、
御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。5 神は、みこころの良しとするところにしたが
って、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられ
ました。」すごいことですね、すべてが神の御手であって、私たちは生きていることがここで分か
ります。あとで、神は「あら、間違っちゃった！」と言わない方なのです。初めから知っておられて、そ
れで予め計画して定めておられて、そしてあらゆることを相働かせて、良いことに、神の御子の姿
に変えるというところまで持って行ってくださいます。

30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。

神のご計画の全貌がここに 있습니다。第一に、予め定めてくださったということです。私たちがイエスを信じる前から、私たちが救われるように定めておられたのです。第二に、召したということです。私たちは、自分が信じて救われたと思っていますが、信じるという選択はもちろん私たちの責任なのですが、神が初めに召して、それに応答したのにすぎません。神の呼びかけがあって、それに応答して、救われているのです。神が救うかどうか決めておられずに、ただ「だれでもいいから、このプレゼントに応募してごらん。」して、自分が応募して何とかして獲得した救いではないのです。初めから神が選ばれていて、神が召されていて、その召しの中で私たちが応答したのにすぎません。

そして、神が召したのですから、神が最後まで責任を取ってくださいます。第三に、「義と認める」とうことをしてくださいました。信仰によって応答した私たちを、義と認めてくださいました。これはじっくりと、3章のところで学びましたね。不敬虔な者を義と認める神を信じたから、義と認められました。自分の行いではなく、キリストの行い、十字架で身代わりに死なれたことを信じて、義と認められます。そして、第四に、栄光が与えられたということです。これが、ずっと見てきた、からだの贖い、栄光の姿に変えられること。罪を宿すからだでなくなり、御子に似た姿であること。正真正銘、目に見える形でも神の子どもとなること、であります。

そしてそれが、「栄光をお与えになりました。」と、過去形、完了形で書いていることです。神は、永遠のご計画で予め定めるところから、栄光を与えるところまで完成しておられるのです！将来のことも、すでに神のご計画されたことがどんどん明かされるにしかすぎません。「箴 19:21 人の心には多くの思いがある。しかし、【主】の計画こそが実現する。」私たちにいろいろなことが、これから起こるでしょう。苦しみや混乱があるでしょう。けれども、神のご計画のみがなります。そして、みなさんが御子の似姿に変えられる、栄光の時も既に定められているのです。

その中で今は、御霊に導かれて、栄光から栄光へと主の似姿に変えられていくのです。この地上で完全は望めません。けれども、キリストが戻られる時に、その完全なものが来ます。次回は、そうした苦しみの中でも、神の愛は健在であるということ、神の愛から私たちが引き離されることは絶対のないことを学んでいきます。